

[B年] 降誕前第7主日(2023年11月12日)**【旧約聖書日課】創世記12章1～9節**

1主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

2 わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

4アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に
行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。

5アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産
をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方
へ向かって出発し、カナン地方に入った。6アブラムは
その地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。
当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

7主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築
いた。

8アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西に
ベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主
のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。9アブラムは
更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙4章13～25節

13神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせる
ことを約束されたが、その約束は、律法に基づいてでは
なく、信仰による義に基づいてなされたのです。14律法
に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無
意味であり、約束は廃止されたこととなります。15実に、
律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違
犯もありません。16従って、信仰によってこそ世界を受
け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのす
べての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼
の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼
はわたしたちすべての父です。17「わたしはあなたを多
くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に
命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる
神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父と

なったのです。18彼は希望するすべもなかったときに、
なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのよう
になる」と言われていたとおりに、多くの民の父となり
ました。19そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既
に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せ
ないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでし
た。20彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことは
なく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。
21神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、
確信していたのです。22だからまた、それが彼の義と認
められたわけです。23しかし、「それが彼の義と認めら
れた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されて
いるのではなく、24わたしたちのためにも記されているの
です。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた
方を信じれば、わたしたちも義と認められます。25イエ
スは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたち
が義とされるために復活させられたのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書8章51～59節

51はっきり言っておく。わたしの言葉を守るなら、その
人は決して死ぬことがない。52ユダヤ人たちは言った。
「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今ははっきり
した。アブラハムは死んだし、預言者たちも死んだ。ど
ころが、あなたは、『わたしの言葉を守るなら、その人
は決して死を味わうことがない』と言う。53わたしたち
の父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死ん
だではないか。預言者たちも死んだ。いったい、あなた
は自分を何者だと思っているのか。」54イエスはお答え
になった。「わたしが自分自身のために栄光を求めよう
としているのであれば、わたしの栄光はむなし。わた
しに栄光を与えてくださるのはわたしの父であって、あ
なたたちはこの方について、『我々の神だ』と言ってい
る。55あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っ
ている。わたしがその方を知らないと言えば、あなたた
ちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはそ
の方を知っており、その言葉を守っている。56あなたた
ちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにし
ていた。そして、それを見て、喜んだのである。」57ユ
ダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないの
に、アブラハムを見たのか」と言うと、58イエスは言わ
れた。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前
から、『わたしはある。』」59すると、ユダヤ人たちは、
石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、
イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 12章1～9節

¹主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれた地と親族、父の家を離れ
私が示す地に行きなさい。

² 私はあなたを大いなる国民とし、祝福し

あなたの名を大いなるものとする。

あなたは祝福の基となる。

³ あなたを祝福する人を私は祝福し

あなたを呪う人を私は呪う。

地上のすべての氏族は

あなたによって祝福される。」

⁴アブラムは、主が告げられたとおりに出かけて行った。ロトも一緒に行った。アブラムはハランを出たとき七十五歳であった。⁵アブラムは妻のサライと甥のロトを連れ、蓄えた財産とハランで加わえた人々を伴い、カナンに向けて出発し、カナンの地に入った。⁶アブラムはその地を通して、シェケムという所、モレの檜の木まで来た。その頃、その地にはカナン人が住んでいた。

⁷主はアブラムに現れて言われた。「私はあなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは自分に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。⁸それからベテルの東の山地へと移り、そこに天幕を張った。西にベテル、東にアイがあった。彼はそこに主のための祭壇を築き、主の名を呼んだ。⁹アブラムはさらに旅を続け、ネゲブへと移って行った。

ローマの信徒への手紙 4章13～25節

¹³世界の相続人となるという約束が、アブラハムとその子孫に対してなされたのは、律法によるのではなく、信仰の義によるのです。¹⁴もし律法に頼る者が相続人であるとすれば、信仰は空しくなり、約束は無効になってしまいます。¹⁵律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。¹⁶従って、相続人となることは、信仰によるのです。こうして、恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。アブラハムは、神の前で、私たちすべての者の父であって、¹⁷「私はあなたを多くの国民の父とした」と書いてあるとおりです。彼はこの神、すなわち、死者を生かし、無から有を呼び出される神を信じたので

す。¹⁸彼は、望みえないのに望みを抱いて信じ、その結果、多くの国民の父となりました。「あなたの子孫はこのようなになる」と言われているとおりです。¹⁹およそ百歳となって、自分の体がすでに死んだも同然であり、サラの胎も死んでいることを知りながらも、その信仰は弱まりませんでした。²⁰彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことをせず、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。²¹神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと確信していたのです。²²だからまた、「それが彼の義と認められた」のです。²³しかし、「それが彼の義と認められた」と書かれてあるのは、アブラハムのためだけではなく、²⁴私たちのためでもあります。私たちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じる私たちも、義と認められるのです。²⁵イエスは、私たちの過ちのために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられたからです。

ヨハネによる福音書 8章51～59節

⁵¹よくよく言うておく。私の言葉を守るなら、その人は決して死を見ることがない。」⁵²ユダヤ人たちは言った。「あなたが悪霊に取りつかれていることが、今はっきりした。アブラハムは死んだし、預言者たちも死んだ。ところが、あなたは、『私の言葉を守るなら、その人は決して永遠に死を味わうことがない』と言う。」⁵³私たちの父アブラハムよりも、あなたは偉大なのか。彼は死んだではないか。預言者たちも死んだ。一体、あなたは自分を何者だと思っているのか。」⁵⁴イエスはお答えになった。「私が自分に栄光を帰するなら、私の栄光は空しい。私に栄光を与えてくださるのは私の父であって、あなたがたはこの方について、『我々の神だ』と言っている。」⁵⁵あなたがたはその方を知らないが、私は知っている。私がお方を知らないと言えば、あなたがたと同じく私も偽り者になる。しかし、私はお方を知っており、その言葉を守っている。⁵⁶あなたがたの父アブラハムは、私の目を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」⁵⁷ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言うので、⁵⁸イエスは言われた。「よくよく言うておく。アブラハムが生まれる前から、『私はある。』」⁵⁹すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月12日「降誕前第7主日」の日課主題は「神の民の選び(アブラハム)」。この日から、伝統的な教会暦の一巡りの終わりの三主日、「終末三主日」に入る。「終末三主日」の最初の主日は「終末前々主日」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「族長アブラハムの物語」の冒頭部分。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「アブラハム」を引用して信仰論を展開する箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、仮庵祭に際してなされた主イエスとユダヤ人たちとの議論の終結部。

旧約日課(創世記12章より)

・「創世記」については、前回資料「聖書と祈りの会 231101」なども参照。「創世記」は、11章までの「原初の物語(原初史)」と12章以下の「族長たちの物語」に分けられる。日課箇所は、「族長たちの物語」の最初、「族長アブラハムの物語」の冒頭部分。

・「アブラハムの物語」は、前段11章で展開された系図の終わりで描かれた「アブラハムの父テラの系図」(11:27~32)に接続する形で始められる。11:27で「系図」と訳されているヘブライ語「トーレドット」は、「創世記」中で「物語」の節目に用いられる語で、「由来」(2:4)、「物語」(6:9)とも訳されている。「族長物語」中でも、「イシュマエルの系図」(25:12)、「イサクの系図」(25:19)、「エサウ、すなわちエドムの系図」(36:1)、「ヤコブの家族の由来」(37:2)などの用例があるが、「アブラハム」と結びつけた用例はない。「アブラハムの物語」は、父である「テラ」の「系図」の枠組みの中で物語られていると言える。

・「アブラハムの物語」の初めに、「アブラハム」は「アブラム」の名で登場する。「アブラム」は、ヘブライ語で「高い父」を意味するものと解され、「高祖」のようなニュアンスの名と考えられる。他方、「アブラハム」は、17章の命名譚で説明されているように(17:5)、「多くの(者の)父」を意味する名。この人物は元来、特定の部族・民族集団の「高祖」的存在であったが、ある時期に、この人物を共通の「高祖」と位置づけて諸部族・諸民族を束ねることが為されたのかもしれない。「アブラハム」は、ユダヤ人が自らの祖と考えるほか、アラブ人も同様にみなしている。このような「アブラハム」の位置づけが、どの時代に定着したのかは不明。

・日課箇所冒頭3節の「主の言葉」は、「アブラハムに対する神の約束」と呼ばれる。15章および17章には「アブラハムと結ばれた神の契約」が描かれるが、12章の「約束」は、それら「契約」の前提として位置づけられている。この「約束」は、「祝福の約束」として告げられている。「祝福」の原語「ベラーカー」は、人が主語になれば「讚美」あるいは「跪拝」とも訳される語で、現世的利益の獲得を示唆するようなものではなく、対峙する相手との相互的親密な関係性を指し示す。

使徒書日課(ローマ7書)

・「ローマの信徒への手紙」については、前回資料「聖書と祈りの会 231101」なども参照。本書簡は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた文書。使徒パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、自身の訪問計画を知らせ、その後のエスパニア伝道への協力を呼び掛けるために記した。

・日課箇所を含む4章で、パウロは、「創世記」の描く最初の族長である「アブラハム」を取り上げ、3章で提示した「信仰による義」(3:28参照)の実例として示し、模範とすべきことを説いている。パウロは、この章を通して、「アブラハムの物語」に含まれる逸話や聖句を次々と取り上げて、「信仰」が「割礼」に先行することを示して見せている。つまり、パウロによれば、「創世記」は次のように展開する。アブラハムがまず神から「約束」を与えられ(創12章、15章)、彼は「神を信じた。それが、彼の義と認められた」(創15:6>ロマ4:3、同4:9)。その後、神はアブラハムを「多くの民の父と定めた」(創17:5>ロマ4:17)契約のしるしとして「割礼」を命じられた。そして、その後、神の約束の実現として、アブラハムは息子イサクを与えられた(創18章以下)。パウロは、このように展開する「創世記」に基づいて、まず「神の約束」があり、その約束に基づく応答としての「神信仰」が、「神の約束」の実現を人が享受する「義」を成立させていると解釈している。そして、「割礼」は、その後の「イサク」誕生に結びつく契約のしるしであり、その血筋を受け継ぐ者にとっては意味があるとしても、「信仰による義」は「割礼」の有無に何ら左右されない、と主張するのである。

・この4章で「信仰による義」が主張されるにあたって、それと対置されているのが「律法」ではなく「割礼」であるという点は注意が必要である。3章で、パウロは、「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰による」(3:28)と主張していた。この命題は、しばしば誤解されてきた。まず、「律法の行い」が、単に「行い」一般に拡大解釈されて、「信仰義認」か「行為義認」かという二項対立で論じられるという誤解が繰り返されてきた。しかし、パウロがこれらの議論で「行い(エルゴン)」として取り上げているのは、もっぱら「律法の行い」であり、より明瞭に言えば「律法の実践」である。次いで、この「律法の実践」であるところの「律法の行い」についても、しばしば拡大解釈され、いわゆる「613の戒め(ミツヴァー)」として知られるような列挙すれば膨大な規範・規則を遵守することが最優先される「律法主義」を指し示すようなものとみなされてきたが、パウロが実際に問題として取り上げているのは、事実上、「割礼」と「食物規定」に限られている。パウロは、「律法の行い」の中でも「割礼」と「食物規定」を、「ユダヤ人」と「異邦人」の生活習慣を外形的に区分している最重要事項と考え、「ユダヤ人共同体」を枠づける生活習慣としての「律法」を、「救いの共同体」の枠組みとしては否定したのである。

福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、福音書構成において「仮庵祭」の場面設定の枠(7 章～10:21)の中に置かれた「主イエスとユダヤ人の議論その1」(8:12～59)の終結部である。8 章は、冒頭に写本上の問題が指摘される「姦淫の女に関する逸話」(8:1～11)が置かれており、8:12 以下は、元来は 7:52 に接続していたようにも考えられる。

・日課箇所を含む「議論その1」の場面に登場する「ユダヤ人」は、必ずしも主イエスに敵意をもって近づいて来た者たちではない。確かに、その前(7 章)から、ユダヤ人の「祭司長たちやファリサイ派の人々」が主イエスに敵意を抱いていることが描かれていたが、8 章に登場する「ユダヤ人たちは、「イエスを信じた」(8:30～31 など)者たちとして描かれる。にもかかわらず、主イエスは彼らとの論争を通して、かえって彼らをご自分から遠ざけてしまったように描かれている。このような描写は、実際に主イエスがそのような論争的で従おうとする者を二分するような働きかけをされていたことを伝えるものとも考えられるが、後に福音書を生み出した「ヨハネの教会共同体」やその指導者「使徒ヨハネ?」が経験してきた「主イエスの弟子たちの共同体」の離合集散を説明する意図で主イエスに語らせているとも考えられる。日課箇所の直前には、「ユダヤ人たちが主イエスに向かって「あなたはサマリア人で悪霊に取りつかれている」(8:48)と言い返す場面があるが、主イエスがサマリア伝道をされたと伝えるのは「ヨハネ福音書」だけで、他の福音書はむしろ「サマリア」を避けていたと示唆していることを考慮すれば、実際にサマリア伝道を本格的に実行したのは「ヨハネの共同体」であって、主イエスに対する「あなたはサマリア人で」という批判も実際には彼ら「ヨハネの共同体」の弟子たちに向けられた批判であったと考えることもできる。

・「ヨハネ福音書」が「アブラハム」に言及するのは、日課箇所を含む「議論その1」においてのみである。最初に「アブラハム」に言及されるのは、主イエスを「信じたユダヤ人たち」であり、彼らは、主イエスの問い(8:31～32)に対して、「わたしたちはアブラハムの子孫です」(同 33 節)と述べた箇所である。「ヨハネ福音書」は、「祭り」の設定を多用することとも関係するが、「モーセ」には繰り返し言及しており、「モーセの民」の正統な継承者であることに関心が強い。他方で、他の福音書での「アブラハム」の言及からは、当時のユダヤ人の間で「アブラハムの子」というアイデンティティ表明が広く浸透していたことがわかる。「ヨハネ福音書」が 8 章で「アブラハム」に言及し、主イエスの「アブラハム」理解を提示するのは、そのような事情を反映していることなのだろう。

・この場面の最後に、ユダヤ人が「石を取り上げ、イエスに投げつけようとした」と描かれるのは、8 章冒頭の「姦淫の女の逸話」で「石で打ち殺せ」という律法が問題にされていることに対応した伏線回収と考えられる。

来週の誕生日 (11 月 12 日～18 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-227 番「主の真理は」(= I-85 番「主のまこと」)は、明治初期の日本人作(国学を学び半キリスト教の意図で教会に潜入した結果信仰を持ち、キリスト教学校で教えながら讃美歌集編纂に携わった松山高吉と推定)の歌詞が原詞。1903 年版『讃美歌』以来、ユダヤ教聖歌の曲と組み合わせられた。
- ・21-184 番「アブラハム、アブラハム」は、20 世紀オランダの詩人ハンナ・ラムと教会音楽家ヴィレム・テル・ブルクが共同して出版した『青少年のための聖書の歌』(1968 年)に収められる讃美歌の一つとして作詞・作曲された。
- ・21-513 番「主は命を」(= I 332)は、19 世紀リバイバル運動の中で生まれた福音唱歌の代表作。作詞者ハヴィガルは、父が英国教会司祭で、多くの宗教詩を残した(21-512「主よ、献げます」など)
- ・21-541 番「また会うその日まで」(= II-23「かみとみにいまして」)は、465 番(I 405)「神とみにいまして」と同じ原歌詞に、ヴォーン・ウィリアムズの曲が付けられた讃美歌で、原歌詞により再訳。英語原歌詞は 19 世紀米国会衆派牧師ランキンが伝道集会のために作詞。

21-513「主は命を」= I 332

I Gave My Life for Thee

1. I gave My life for thee, / My precious blood I shed, / That thou might'st ransomed be / And quickened from the dead. / I gave My life for thee; / What hast thou given for Me?
2. I spent long years for thee / In weariness and woe / That an eternity / Of joy thou mightest know. / I spent long years for thee; / Hast thou spent one for Me?
3. My Father's home of light, / My rainbow-circled throne, / I left for earthly night, / For wanderings sad and lone. / I left it all for thee; / Hast thou left aught for Me?
4. I suffered much for thee, / More than My tongue may tell, / Of bitterest agony, / To rescue thee from hell. / I suffered much for thee; / What canst thou bear for Me?
5. And I have brought to thee / Down from My home above / Salvation full and free, / My pardon and My love. / Great gifts I brought to thee; / What hast thou brought to Me?
6. Oh, let thy life be given, / Thy years for Me be spent, / World's fetters all be riven, / And joy with suffering blent! / I gave Myself for thee: / Give thou thyself to Me.

21-184「アブラハム、アブラハム」

【ドイツ語版】

Abraham, Abraham, verlass dein Land

Abraham, Abraham, verlaß dein Land und deinen Stamm!

1. Mach dich auf die lange Reise / in ein Land, das ich dir weise. / Du sollst gegen allen Schein / Vater meines Volkes sein.
2. Ich versprech dir meinen Segen, / bin mit dir auf allen Wegen; / alle Menschen, groß und klein, / solln in dir gesegnet sein.
3. Auf das Wort hin will er's wagen; / ohne Klagen, ohne Fragen / steht er auf und zieht er fort, / Richtung zeigt ihm Gottes Wort.